

## 「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「次世代を担うグローバル人材の育成について」

日時 平成28年1月19日（火） 午前10時5分から12時5分まで

場所 恵みシャレー軽井沢 喫茶ウッドシェッド（軽井沢町）

### 目次

- 1 開会 . . . . . P 2
- 2 意見交換 . . . . . P 2
- 3 閉会 . . . . . P 23

鼎談者 小林りん氏

（学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢（ISAK）代表理事）

阿部守一（長野県知事）

伊藤学司（長野県教育委員会教育長）

## 1 開 会

### 【広報県民課長 藤森茂晴】

皆様、お待たせいたしました。ただいまから県政タウンミーティングを開催いたします。意見交換までの間、進行を務めさせていただきます、私、長野県の広報県民課長の藤森茂晴と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

今年度10回目となります本日の県政タウンミーティングは、「次世代を担うグローバル人材の育成について」と題して、古くから外国とのつながりの深い軽井沢町にて開催いたしました。大勢の皆様お集まりいただきまして、ありがとうございます。

それでは、これから正午までということで意見交換に入りたいと思います。なお、意見交換の内容については、お名前等の個人情報を除き、後日、県のホームページで公開させていただきますので、ご承知ください。

本日は、このテーマに関する有識者として、学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢（ISAK）の代表理事でおられます小林りん様をお招きいたしました。ご紹介申し上げます。小林様は経団連からの奨学金を受け、カナダの全寮制インターナショナルスクールに留学されたご経験から、大学では開発経済を学び、前職はユニセフ（UNICEF。注：国連児童基金）のプログラムオフィサーとしてフィリピンに駐在されました。そこで、ストリートチルドレンの非公式教育に携われ、圧倒的な社会の格差を目の当たりにして、リーダーシップ教育の必要性を痛感、学校を設立するため2008年8月に帰国されました。2014年8月に、日本初の全寮制インターナショナルスクールとなる「インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢」を、この軽井沢町に開校されました。皆様ご承知のことと存じます。2012年には雑誌アエラの「日本を立て直す100人」、日経ビジネス「次代を創る100人」にそれぞれ選ばれました。また、日経ビジネス「チェンジメーカー・オブ・ザ・イヤー2013」、日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2015」大賞も受賞されております。現在は、国の教育再生実行会議のメンバーを務めておられます。本日はお忙しい中ありがとうございます。

それでは、伊藤教育長、この後の進行をお願いします。

## 2 意見交換

### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

皆様、おはようございます。朝早くからタウンミーティングにお集まりいただきまして誠にありがとうございます。交通事情により遅参いたしまして開始が遅れましたこと、まずもってお詫び申し上げます。知事もまもなく到着しますので、今日は小林りんさんをお招きし知事と私、司会を兼ねながら、次世代を担うグローバル人材の育成方策について、また、幅広くグローバルの視点から見た教育の課題や今後の取組をどうするかについて、鼎談という形で話を進めてまいりたいと思います。ざっくばらんにやらせていただきたい

と思います。

りんさんはこの軽井沢に根をおろしながら、世界に向けての人材育成や、教育再生実行会議という官邸に置かれる大きな会議の中で、日本の教育のあり方についても様々な観点でご示唆いただいているところです。私どもの長野県を考える上でも、りんさんの実践やご発言は大変ありがたく、また注目しておりますので、忌憚のないご意見をいただければと思います。

今日は2つの大きなテーマでお話をさせていただきたいと思います。トータルとしては「グローバル人材の育成」でございますが、前半はグローバル人材、国際的に活躍する人材の育成についてを主眼に置き、後半はこれとも関連しますが、“think global act local” “グローバル”という言葉があるように、グローバルとローカルは二項対立ではなく表裏一体のものではないかと。そうした中で、私たちがグローバル人材の育成を進める上でも、信州のことについてしっかり学び理解し、課題を解決できる力を身につけなければいけないということで、信州について学ぶとことにも話を広げていきたいと思います。

まず、前半はグローバル人材の育成についてですが、最初に簡単に長野県の取組についてご説明します。社会のグローバル化については、20数年前から日本の教育は国際化に対応しなければいけないと言われる中、長野県においても英語教育の改善等に取り組んでまいりました。しかし、昨今のグローバル化は、単に、英語の能力が非常に堪能になって国際的に出て活躍すればいいという一部の人間のグローバル化から、日本社会全体がグローバル化の中に飲み込まれる中で対応していかなければならないということになっています。外交官になったり商社に入って世界を飛び回るといった人間のグローバル人材の育成という観点から、より幅広い多くの子ども達がグローバル化に対応していかなければならないということです。更には、「内なるグローバル化」と言われていますが、これから多くの移民の受け入れをどうするかという問題。少子高齢化の波の中で日本は単純労働に外国人を受け入れなければいけない時代が来るのではないかと指摘もあります。日本の、いわゆるグローバル企業以外の多くの企業が外国人を積極的に採用するようになり、長野県の中小企業も日常的にグローバルな取引をするようになる中で、県全体の教育として、子どもたち全員がグローバルな素養を身につけなければならぬとの視点で、私たちは考えています。その意味では、トップと裾野の両方を広げていかなければいけないし、当然、その根底としての英語教育の改善・充実にも関わっていかなければいけないとの視点でおります。グローバルリーダーとして世界の問題解決をしようとする人材を育成するため、スーパーグローバルハイスクールとして国の指定を受けた長野高校と上田高校の2校で、英語のみならず、探究型の学びを通じて問題の発見と解決策を自ら調べ考え、友達とディベートしながら一つの案を練り上げ、共同で実行していく教育をスタートさせたところです。そのほかに、高校生の留学促進として、長期、短期、一週間程度など、海外に目を向けてもらうための3段階の留学支援をしています。特に、今年からの新規事業で、県独自の支援として、一週間程度フィリピンへ約30人の高校生を派遣することとしました。欧米だけでなく、アジアの中で様々な課題解決に向けた取組を学んでもらうということです。また、他の高校、中学校にALT（注：外国語指導助手）を配置し英語教育の充実及び異文化理

解の促進に努めています。英語教育についても、英語中核教員（CET：Core English Teacher）を養成しながら、それぞれの学校の中で「英語で何ができるか」、「英語ができる」ではなく「英語を使って自分の考えを伝えられるか、困っている人を助けられるか、生活で自分が困らないでできるか」に主眼を置きながら英語教育の改善にも努めています。こうした形で市町村とも協力しながら、小中高の英語教育の充実、更にはそこから先のグローバルの本当の力の育成に取り組んでいるところです。

グローバル社会に求められる力とはなかなか難しいと思うのですが、小林さんが実際今目指していること、幅広く世界を知る中でグローバル社会に求められる力について、ご自身の経験を踏まえて発言をお願いできればと思います。

### 【小林りん氏】

ありがとうございます。本題に入る前ですが、学司さんと私は、もう5、6年以上前ですか、ISAKがまだ構想段階で、立ち上がると信じる人が文科省の中でも少なかった頃、文科省の方としてお目にかかりました。そのときから、学司さんを筆頭に、文科省の沢山の方々のものすごくフレキシブルで革新的ないろいろなアイデアによって、私たちの学校がスタートできたのです。お礼を申し上げたいと思います。

私たちの学校がやっていることの前に、まず、マクロの部分として、先程、移民とか、英語やグローバル教育は一部の人のものではないんだというお話がありましたが、これについて一つデータを紹介させていただいた上で、私どものやっていることを共有させていただきたいと思います。

日本の中では、5～10年位前までのグローバル人材とは、商社の第一線で海外に行ってローカルオフィスで海外の地元の人達と一緒に仕事をする人など、本当に一部の人達を対象とした言葉だと捉えられていたと思うんですね。海外で販路をつくる時に、現地の人達とうまくコミュニケーションできる能力が必要だということでグローバル人材と捉えられてきたと思います。ただ、今日本で何が起こっているかというと、現段階で6000万人以上いる日本の労働人口が2050年までの30数年で4000万人を切ると言われています。これは、たとえ女性がスウェーデン並みに社会貢献したとしても、またフランス並みに出生率が回復したとしても、そして高齢者の方が皆さん65～70歳まで働いたとしても、それでも5000万人を切ると言われています。要は、どんな少子化対策をしても、どんな女性活躍を推進しても、この国の労働人口は1000万人単位で減っていくという時代を迎えます。もちろんテクノロジーの活用等は必要ですが、それをやっても労働人口の減少は補いきれない。その中で、先程おっしゃったように、日本の中で移民も含めて外国人の方々に頼らなければ、国の経済は、発展はおろか維持さえも難しくなっていく状況かと思っています。これは、決して悲観的になる必要はなくて、逆にいろいろな分野で沢山の外国の方々を迎え入れる、非常にエキサイティングな時代が来るんじゃないかなあと思っています。

マクロとしてもう一つ、問題設定能力。先程、探究心とか自分でものを発見する力とのお話ありましたが、何故それが大事なのかという背景にあるデータを一つ。これは予測でしかありませんが、2011年に米国のデューク大学の教授が発表した予測の中で、全米で2011

年に小学校に入った全ての米国人が大学を卒業するときに就く職業は、65パーセントは今の職業に就くだろうと言われていました。これから15年位の間で、先進国においては3分の2の職業はなくなって新しい職業に入れ替わっていくという予測が出ています。予測によっては45～65パーセントとレンジは広いのですが、何を言わんとしているかという、今小学校、中学校、高校にいる方が社会に出る頃には、おそらく半分以上の職業がなくなって新しいものになっているという時代なんです。ということは、英語はもちろんですし、ダイバーシティの中で、多様性を寛容できることもさることながら、既存路線を踏襲するのではなくて、新しい問題や何がこの時代に来るのかとか次は何がニーズがあるのかということに着眼できることが非常に大事だと思っています。

今申し上げた二つのマクロ的な認識を背景に、私どもが学校でやっていることを最後にお話したいと思います。三つございます。一つは言うまでもなく、多様性です。長野県内においても沢山の国民性、あるいは自分の常識を常識としない人達と一緒に生活し仕事する時代がすぐそこまで来ていますので、多様な価値観の中で仕事や意見交換ができることが必要だと思っています。二つ目に、問題設定能力を挙げます。問題解決能力という言葉は聞くことがあると思いますが、解決能力とはそこに既に問題があってそれをうまく早く解く力です。これも大事ですが、これからは何が解くべき問題かさえも分からない。なぜなら、私たち大人が見たこともないスピード感で世界が変わっていくわけで、私たちが予測できない世界を私たちの生徒たちは生きていくのです。なので、こういうスキルは大事だよ、こういう世界になるよと大人が言うのはもはや時代遅れで、どういう時代になってもいいように、子ども達が自らの力で先見性をもって進んでいけるようなスキルを見つけることが非常に大事だと思っています。三つ目に、教育界が一番言いにくいことですが、リスクテイク。リスクを採る力、前向きに言うと、困難に挑む力。これをすごく大事にしています。繰り返しになりますが、見たこともないスピード感で世の中が変わっていく中で、新しいものを打ち出していき、新しいことに取り組んでいくためには、必ず失敗もあると思いますしリスクも伴っていく。その中で、前向きに取り組んでいく、失敗を恐れずに挑んでいく力は非常に大切です。実はこれが、私たちが全寮制である一つの大きな理由でもあります。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

今、ISAKの目指す三つのねらいをお話いただきました。ISAKは世界的にもそうですし、日本国内ではものすごく注目を集めている学校で、アジアを中心に海外から沢山の子ども達が来ていて、非常にハイレベルな教育をしていることから、実は教育界でも「いわゆるエリート教育じゃないの。」というイメージがすごく強いんです。が、今お話いただいた三つのことを目指していて、それは別にISAKに限らず、日本の、そして長野県の教育界でも目指さなくてはいけない点ではないかと。

#### 【小林りん氏】

大変重要な点に触れていただきました。私どもエリート教育と思われがちなんですが、

内容は今申し上げた三つであると同時に、奨学金をすごく重視しております。というのも、多様性といったときに、これは決して国籍が多ければいいだけではないと思うんですね。逆に、同じ国内でも貧富の格差、あるいはフィリピンやインドネシアなど国内での宗教観の格差、いろいろなものがあって、現実社会の多様性を全てを内包するために、私どもは今、1年生2年生100人おりますが、70人の生徒に対して経済状況に応じた奨学金を、全額から部分奨学金を返済不要の給付型で出させていただいております。長野県人枠も設けさせていただいております。実は長野県人の方に限って全額奨学金をご用意させていただいております。昨年度も今年度も日本人としては長野県人だけが全額奨学金が出ております。1、2年生で日本人が約30人おりますが、うち確か12名かそれ以上の生徒には何らかの奨学金を給付しているという状況です。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

それでは、知事の考えるグローバル人材や教育について、お考えをお聞かせいただければと思います。

#### 【長野県知事 阿部守一】

あらためまして、おはようございます。今朝、福祉施設に行ってきたんですけども、雪の関係でここに来るまでの道路が渋滞して遅刻しまして、大変失礼いたしました。

小林りんさん、今日このタウンミーティングと一緒にお話をさせていただくこと、大変嬉しく思っています。ありがとうございます。

まず、グローバル人材の育成という観点で、私が県知事として感じていることを少しお話させてもらいたいと思います。今、長野県が具体的に取り組んでいることの一つに、新しい県立四年制大学を創ろうということがあります。平成30年度の開学を目指して取り組んでいますが、その大学の基本的理念や考え方は、グローバル社会の中で活躍できる人材、そして、地域にイノベーションを起こせる人材、グローバルとイノベーションの二つが基本的な重要なコンセプトだと思っています。人口減少社会で子どもの数も減っているのに、何故今さら県が四年制大学なんか創るんだというというご議論が、実はあります。もちろん、子どもの数が少なくなっている中で、確かに今までと同じことを同じように繰り返しているだけであれば、新しい大学は必要ないだろうと私は思うんですが、県知事として長野県全体の発展、繁栄を願っているいろんなことを取り組む中で、地域の発展の中で学びの場が充実していないとすると、例えば企業誘致したいと考えたときに何を言われるかということ、一昔前なら道路はどうか工業用水はどうかという企業活動の観点から見た工業インフラの話が強い要請事項だったと思います。今、いろんな方と話をしていて、もちろんそういう話も話題に出ることもありますが、むしろそれよりも言われるのが、教育は大丈夫ですか、従業員の子ども達の教育はしっかり受けられますか、優秀な人材は確保できますか、という話です。それからもう一つは、医療が充実していますか、安心して暮らせる場所ですか、ということです。右肩上がり経済成長していた頃の企業の皆さんのニーズとはだいぶ変わってきているなと思っています。長野県は実は、大学の収容定員が日本の中では

最低レベル。18歳人口に対する受入定員が最低レベルで、長野県にはそもそも大学が少ないんです。教育県のイメージがあるんですけど、それは昔、寺子屋が多かったとか小学校の就学率が高かったとかで教育県と言われていたわけで、これから長野県を発展させていく上でも、もう一回教育に焦点を当てていかなければいけない。高等教育については非常に収容定員が少ない中で、地域の価値を向上させていく上でも、大学は非常に重要だと思っています。そういう意味で県立大学を創っていきますし、信州大学あるいは県内私大に対する支援もこれまで以上に強化していこうと思います。では、何故グローバル、イノベーションを新しい大学のコンセプトにしているかということ、私が県知事として仕事をやっていく中では、常にどの分野でもグローバルな視野抜きには語れない時代だからです。長野県の成長産業は製造業ですが、製造業は今や世界と戦っているわけで、長野県にも世界シェアトップとか国内シェアトップとか、世界的にかなり重要な部分を担っている企業が多いのです。それから農業はTTPの問題等もありますが、これからは守りではなく攻めの農業にしていかなければいけないということで、例えば、これから川上村ではレタスでベトナムから研修生の受け入れをやっていこうと、昨日も藤原村長と具体的な話をさせてもらっていますし、県内の農業者が海外に進出していこうという動きも具体的に出ています。それから長野県の重要産業は観光ですよ。軽井沢などはまさに観光の中心でありますけれども、今や人口減少社会の中で、国内の観光客を相手にしているだけでは確実に需要は減ります。むしろ、今伸びているインバウンド。長野県は昨年66万人泊という観光庁データですが、これを5年間で132万人泊に倍増させようという目標を立てています。観光をとっていても海外とのつながり、海外のお客様に対するアピール、そういうものができなければ産業として成り立たない時代になっています。世の中の変化を見れば、グローバル人材の育成というのは不可欠だと思っていて、今回の大学のコンセプトにもグローバル人材の育成と入れています。なお、理事長予定者にはSONYの社長をされた安藤国威さんにやっていただき、学長予定者は、金田一京助さん春彦さん一族の金田一真澄先生になっていただいていますので、理事長学長ともグローバル、イノベーションの視点を強く持って大学の準備をやってもらっているという状況です。もう一点、多様性って大事だと思っています。小林りんさんにおっしゃっていただいたように、発展していく地域は、多様な価値観を受け容れられるような土壌がないと、多分これからは無理。閉鎖的な社会であったり特定の人達のコミュニティだけで地域を発展させていくことは、無理だと思います。世界の国々との関係性を強化して、世界の活力を長野県に取り込んでいくことが大事だと思いますので、そういう面でもグローバル教育は大事だと思っています。

若干、今日のテーマとずれるかもしれませんが、私は教育は是非、この多様性を突き詰めていきたいと思っています。日本の教育というのはこれまで、どちらかというと多様ではなく画一ですよ。とにかくみんな同じことできればいいと。なおかつ、できない部分を補強しましょうと。5段階評価で「5」もあるけど「1」もあるみたいな人材をつくるよりは、とにかくオール3の人間をつくれればそれが良いんじゃないかみたいな社会が続いていた気がします。多分、画一、大量生産、工業社会の時代の人材育成には、みんな平均的な知識と経験、能力を持っている人達をつくっていくことが望まれたし、それが社会

の発展にとっても実は良かった時代だと思いますけれども、これから先はとてもじゃないけどそんな時代ではないので、むしろ、伸びる子の能力はうんと伸ばす、でこぼこあってもできる分野を最大限伸ばしてあげるような教育をすることが大事だなと思っています。今、発達障害の子ども達の支援をしています。例えば、芸術分野ですごい能力を持った子ども達があります。海外ではそういう子どもたちの能力をもっと伸ばそうとやっていますけれども、日本は障がい者や発達障害というのと、とどちらかというところ「普通のことをさせなきゃ。」「困った子たちだね。」というような、ともするとそう扱われがちです。実はそういう子ども達の中にも、極めて素晴らしい記憶力を持っていたり芸術的な才能を持っている子がいたりするので、そういう子どもたちの能力を引き出せるような教育をしていきたいと思っています。長野翔和学園というところで「ギフテッド教育」といって、持っている才能を最大限伸ばそうという教育をやってもらっていますけれども、県内全体の教育も、均一画一な子どもを育てるのではなく、その子の持って生まれた能力、本当に伸ばしうる能力を最大限引き出してあげるような教育ができればと思っています。

#### 【小林りん氏】

今、特別支援の話がありました。昨年の終わりからなんですけれども、新しい文科大臣の下での教育再生実行会議、毎月1回ずつ総理官邸で行われている会議のメンバーを拝命しているんですが、今期のテーマが一億総活躍ということもありますので、どうやって様々な個性を持った子どもたちが活かされる教育をできるようにするかが大きなテーマになっていると理解しています。とはいえ、現場の先生方の負担はものすごく大きくなっているのは、ヒヤリングをされていてひしひしと感じています。特別支援コーディネーターの方が兼任になっているケースが非常に多いんです。教育再生実行会議の中では特別支援学校、特別支援学級のことでも話題になることが非常に多くて、普段の先生方はただでさえすごくお忙しい中で一人ひとりの学習プランを個別に作ることがかなり負担がかかっていることも認識しておりますので、前回の会議では、是非、特別支援コーディネーターを兼任ではなくて専任化した方が良いのではないかと提言させていただきました。また、もちろん公立の中で受けられればベストだと思いますけれども、小規模のものでも、長野翔和学園のような私学がこの部分に関してもっと沢山できるように、規制緩和のような土壌ができればヒントになると思って、こうした二つの提言をさせていただきたいと思って活動しています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

知事からは大きな視点での提言をいただきました。グローバル人材というと頂点の方というイメージなんですけど、そうではなくて、先程のりんさんのご発言もそうですが、幅広く県民全体がグローバル人材にならなければいけない。すごい能力を持っているというのではなくて、多様性の中で共同して自分の力を発揮していくことができる力だと思います。知事から大学のお話いただきまして、県立大学の目指すものとISAKが今取り組んでいるものは、例えば寮を中心にするなども含めて、実は似通っているのではないかと思うのです。



が、りんさん、例えば寮にいろんな人が集って2年目に入って、いろんな軋轢も生じていると思います。そういったカリキュラム外の部分のパワーというのが重要になってくると思うのですが、どうですか。

#### 【小林りん氏】

まさにその通りだと思います。私どものような全寮制の学校を海外ではボーディングスクールと呼ぶのですが、世界中から先生方をリクルーティングしてくる際によく言われる言葉がありまして、先生の職業の内訳として、ティーチング、いわゆる授業の中で教えるのが3分の1、3分の1が部活や課外活動の指導で見えるチームワーク、3分の1が寮の中で培われる人間力と言われていています。全寮制の場合は、ティーチング、コーチング、ボーディングの三つが先生の本当の仕事じゃないと言われていまして、教師を採用する際に私どもはこの三つを非常に重視しています。今29カ国の生徒が100人集まっていますが、何が起こるかという、半分冗談のような話ですが、この間、一部屋の中に日本人、タジキスタンからのイスラム教徒、シエラレオネからの敬虔なクリスチャンの3人の女子がいたんですね。クリスチャンの子は毎朝ものすごい大きい声で賛美歌を歌うらしく。敬虔なクリスチャンなら当然のことなんですが、他の子は朝6時から賛美歌を歌われると困ると揉めたそうです。日本人の子が仲裁に入って、3人にとって寮の部屋の中で何が一番大事な規律か話し合おうと言ったら、イスラム教徒の子は“Only the God knows.” それアラマーなの、キリストなの、で揉めたっていうんですね。何が絶対的な価値か、最後が一緒じゃない子どもたちが寝食を共にして様々な価値観の中で一つのルールや秩序を築き上げていくことから学ぶことは、授業の中ではなかなかできないことだと実感している日々でございます。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

そういった中で、グローバル人材の育成は、ISAKや県立大学だけでなく、県内全ての学校で、小学校段階からグローバル社会を生き抜いていく力を育成していくことが大変重要な課題であると思っています。今日は教育関係者も沢山お越しいただいておりますので、こういうところも非常に関心が高いと思いますが、冒頭ご紹介ございましたように軽井沢町は国際都市であります。こうした環境もいかしながら町では小学校段階から小中高連携して英語教育の充実をはじめ、グローバル社会に対応した教育の充実を早くからお取り組みいただいているところです。今日は町の教育長にもお越しいただいておりますので、その観点から軽井沢町の目指しているところ、また、ISAKとの連携についてご発言頂ければと思います。

#### 【軽井沢町教育委員会教育長 萩原 勝氏】

冒頭ですが、15日未明に起きましたスキーバス転落事故について、皆様にご心配ご支援いただきましてありがとうございます。ご遺体等も近くの施設から無事に搬出できました。

軽井沢町のグローバル教育について少しご説明させていただきます。軽井沢町は保健休養地として130年という長い歴史があり、130年前には既に外国人の方がここを訪れています。国際交流として子どもを育てる基本は何かといったときに、小中高の教育が原点であると考えてきました。ほとんどの学校では小学5年から外国語活動としてやっていますが、軽井沢町では既に小学校1年からALTとコミュニケーション能力を高めるような取組をしてきました。今、町の施策では、県が進めるグローバル教育推進の協力校としていただき取り組んでいます。町内でのISAKの存在は非常に大きく、毎週金曜日にISAKの生徒が各学校に出向いてきて、ボランティア活動等の中で異文化理解、異文化交流を進めており、その中で子ども達はグローバル化してきていると感じています。これはエリート教育ではなく、一人ひとりに合ったグローバルということが大事なことと捉えています。今後も県とも協力しながら進めていきたいと思っています。

もう一つは、28年度に答申される第2次高校再編で、軽井沢町は観光立町ですので、軽井沢高校では、特色ある学校づくりについて来年度からデュアル教育として観光に立脚した教育活動を進めたいとして、今までの2日間程度の職業体験学習ではお客さん程度の感想にしかならないため、もう少し広げてデュアル教育に繋げるということです。それから、生徒間の交流だけでなく、施設も含め発展的に考えながら進めていきたいと思っています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

今、軽井沢高校の取組についてもご紹介いただきました。グローバルスタディコースという普通科の中のコース制の形で、3年生なら必修で2単位で基礎的な接客や会話表現を学んだり、観光業で活躍されているいろいろな方の特別授業を通じて軽井沢町に根差しながら世界を見ていくという、実地も含めた教育を組んでいます。これを推進する上でも小中高の連携、そしてISAKのご協力もいただきながら連携させていただいているところです。

さて、英語教育の充実も含めて、グローバルな視点は全ての長野県の子ども達に必要なことで取り組んでいかなければいけないのですが、大学は知事の責任、高校以下は私の責任となりますので、県政全体を司る知事から見て、もう少しこうすべきじゃないかなど不満や思いがあるんじゃないかと思いますが、ざっくばらんにいかがですか。

#### 【長野県知事 阿部守一】

県知事として仕事をしていて、教育行政は非常に役割分担、責任分担が複雑な形になっているので、正直言って隔靴搔痒の感があるのは事実ですよね。県の中で、一応私は統括的な行政の代表ですけども、教育行政においては教育委員会が権限と責任をもっているんで、予算の部分と一部は私も関与しますけれども、基本的な政策方針は教育委員会がやっています。特に、小中学校は市町村教育委員会がやっていますし、市町村立学校の予算の話は市町村長のテリトリーになりますので、私はこの間の総合教育会議でも話したけれども、是非、県と市町村の教育長と市町村長と私が一堂に会して教育を語り合う場をしっかりとつくる必要があると思っています。

グローバル教育の観点で言えば、自分のことを考えると、一体何年英語を勉強したかな

と。学校でも勉強したし自分でも勉強したし、それでもろくに話せない教育とは一体何なんだろうかと正直、思っています。日本の教育はこれだけの時間とコストをかけて英語を中心とした外国語教育をやっているわけですから、これは多分、適切な時期に適切な方法で適切な指導者がしっかり指導すれば、もう少しやり様はあるだろうというのが正直な感覚です。そこは是非、教育委員会の皆さんにしっかり模索してもらいたいと思います。私なんかは“*This is a pen.*”から始まった世代であります、やっぱり目的は人と人とのコミュニケーション。多様な社会の中でいろんな方とコミュニケーションできることが望ましいと思いますので、そういうことを基軸に据えて教育委員会で取り組んでいてもらいたいし、私はそういう取組は最大限、全面的に応援をさせてもらいたいと思います。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

力強いお言葉ありがとうございます。今、英語教育の話になりました。私も同じで、ずっと英語教育を受けてきましたが残念ながら英語は・・・という状況ですが、日本の英語教育、今、ずいぶん改善をされてまいりました。昔は“*This is a pen.*” “*I am a boy.*”とやっていましたが、今はそんな教科書は全然ありませんで、“*Hi,*”から入っていくコミュニケーションツールとすることを目指しております。それでも、まだ改善の余地は多いのではないかと、もしくは、成果として十分な力が付いていないのではないかとという批判は強いのです。りんさん、日本の英語教育というのはどの辺が課題で、こうしたらいいのではないかとというアドバイスなどいただけますでしょうか。

#### 【小林りん氏】

私も“*This is a pen.*”世代で、小中高とずっと公立の学校でしたので、カナダに留学して、授業は分からない、友達はできない、彼氏はできないという悲惨な状況だったので、それから顧みると、まさに教育長から“*Can Doの英語を学ぶ*”とお話があったように、英語を使って何ができるかというところに主眼が置かれる教育が大事だと思うんですね。その観点からすると、軽井沢中学校は4月からは体育の先生にネイティブの方が着任されますが、それは何年か前のISAKのサマースクールにサッカーを教える外国の方がいて、是非中学に来てくださいとやったんです。体育とか家庭科とか音楽とかそういったところから英語でやることによって、体を使いながら英語を使う方が体得しやすいという脳科学のデータが出ていますので、英語で英語を一生懸命勉強することも大事なんですけれども、プラス体を動かしたり何かをしながら英語を使うのが大事です。

先生がすごく大変だと思うのですが、自分達だけでやろうとせずに。長野県はALTを大勢活用されていると思いますので。都内だとTeach For Japanという組織が立ち上がっています。これはもともとアメリカにTeach For Americaという世界的なNPOがあって、その日本支部です。教員免許はもっていませんが、大学を出たばかりの若手の優秀でやる気のある方を2年限定で教育現場にアシスタントとして派遣するというものです。もちろん、これが教育行政の中ではどこにフィットするのかという問題はあると思うのですが、英語が非常に堪能な若い世代の方達をもっと活用して、現場の先生の力にしていくということ

はもっと検討の余地があるのではないかと考えています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

Teach For Americaは、アメリカではグーグルよりも人気があるんです。永久に勤めるのではなくて、自分のキャリアで大学を出た2年間この経験をして社会に飛び立っていく中で、非常に大きな成果を挙げているものです。我々も地域の方々のご協力を得て教育を進めていこうということで、信州型コミュニティスクールという言い方をしています。様々な観点で教員がコーディネーターとなって、地域人材、外の人のお力を借りながら地域全体で子どもたちを育てよう。軽井沢や白馬には地域に外国語ができる方が沢山いらっしゃいますので、こういう方々のお力を借りるのもこれからの教育の一つの方針ではないかなと感じたところです。

さて、今日はタウンミーティングということですので、会場の皆様からも是非ご意見やご質問などいただければと思っております。挙手をお願いします。

#### 【参加者A】

一つはコミュニティの国際化について。是非、県や町の政策の中に取り入れて欲しいのは、外国から来てコミュニティに住んでいる人や一時的に来ている人を、従来はゲスト、お客さんとして遇する、別に言えば、あまり積極的におつきあいはしたくないが丁寧におもてなしするという態度が強かったと思いますが、これからのグローバル化された日本のコミュニティを考えると、外国から来た方もコミュニティの中で、いろんな仕事を通じて貢献をしていただくという視点で接することが大事だと思います。国際交流として親善を深めていくことだけでなく、外国人の方々にも様々なプロジェクトにも参加して多様な人が顔をあわせて軽井沢町をもっといいまちにするために協力する。プロジェクトに積極的に協力してくれるので、共同協力という関係を地域コミュニティの中にも作ることも大事です。政策決定のプロセスにも外国人を招聘して意見を聞くということも是非必要ではないかと思えます。

もう一つ、教育分野においても多様性が大切だということはおっしゃるとおりだと思います。多様性がなければあらゆる分野で物事が健全には進まないと思います。小林さんがおっしゃったように教員が今、非常に忙しすぎますね。個別の教育プログラムを考えるのは障がいを持ったお子さんに限らず大事なんですが、一人ひとりの子どもを見つめながらゆっくりと考える時間がない。設置者である市町村や県が、もっと教員を教育に集中できるように、教育以外のことはあまりしなくていい体制にしていきたいと思えます。

#### 【参加者B】

自分の仕事は教育とはあまり繋がらないのですが、外資系なので今年になってからアジアの方もスタッフに増えています。今までの日本人スタッフと中国や台湾から新しく入ったスタッフの間のコミュニケーションがうまくいっていない気がしています。難しいと感じているのですが、こういったコミュニケーションは学校教育とは違うと思うので、

どのように改善していくのか、自分がすればいいことなのか社会が改善することなのか、どうなんでしょうか。

**【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】**

この点、りんさんのところでは、いろんな国から先生が来ていますし、それぞれ文化も違うし日本の教育について戸惑いを感じている方もいるでしょうから、そういう異文化の方々を束ねていく上での秘訣などあれば教えていただきたいんですが。

**【小林りん氏】**

現場のスタッフ同士でやることとマネジメントでやることの二つがあると思います。

私どもの教員もたくさんの違う国から来ていますが、どうしても違うところに目が行きやすいのですが、違うところよりも似ているところ、好きな音楽が同じ、好きなワインが似ているというように、共通項を見つけ出す努力をする必要もあるかなと思います。生徒の場合も音楽とかタレントとか好きなものを見つけています。

一方、マネジメントサイドで私たちがやっているのは”What’s most important?”何が一番大事なのかを組織として常に問いかけることです。いろんな意見があるけど、学校として何が一番大事なのか、学校としてのミッションはどこにあるのか。まず、そこに立ち戻ることが非常に大事です。みんなミッションを目指して世界各国から集まってきたので、総論は同じなので、そうすると、意外と細部の違いは、じゃあ妥協しようかとなったり、それぞれ勝手に話し合ったりし始めるといったことが起こります。頑張ってください。

**【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】**

知事もおっしゃっていましたように、これまでは違いをあまり認めない教育を受けてきた世代が、今働いているわけですので、違いに目が行きがちになってしまうかもしれません。これからの教育としては、その違いを違いとして認めながら多様の中でどのような共同をしていけるのかというコミュニケーション能力をしっかりとつけていかなければいけないところが、今の社会から見える教育の改善点かと実感したところです。

**【長野県知事 阿部守一】**

最初の方のお話にありましたように、外国の方をもっとコミュニティに貢献してもらえようというのは、私も全くそのとおりだと思います。今までどちらかというと、行政の施策では、外国人はお客様扱い、支援をする対象者という形になっているので、この発想はそろそろ180度変えなければいけない時代になってきていると思っています。県の審議会もこれまでは女性比率を高めようとやってきましたけれども、外国人の方に積極的に入ってもらえるようにしようと思っています。県として今、働き方改革の問題であったりリニア中央新幹線のまちづくりどうしようかとやっている中で、いろんな方からアドバイスをもらえないかと考えている中で、「新・観光立国論」を書かれているデービッド・アトキ

ンスさんの意見を聞けないかとか、働き方だったらお笑い芸人とIT企業をやってる厚切りジェイソンから意見を聞けないかというのを関係部局に指示していますので、そういうところから多様な意見を取り入れていきたいと思っています。

学校の先生が忙しすぎだというのは、私も実はそう思っています、忙し過ぎであると同時に、私が感じているのは、あれもこれもやれというのは無理じゃないかと正直思っています。学力も上げろ、体力も向上させてくれ、修学旅行もつつがなく連れてって、保護者への対応も万全にしてくれ、発達障害で支援の必要な子どもにはそれなりの配慮をしろと、何でもかんでも学校のことは学校の先生が全てやらなければいけないというのが今の日本の考え方になっていますけれども、私はそれは変えなければいけないと思っています、学校の先生は先生でやるべきことをしっかり責任をもってやってもらわなければいけないんだけど、伊藤教育長に信州型コミュニティスクールを進めてもらっている私の思いは、やっぱりみんなで学校に関わって、地域の人達が教えられることとか協力できることは山ほどあるわけで、そのことが子どもたちにとっても学校の先生にとってもプラスになるし、地域の人達にとってもプラスになる。みんながWINWINの関係になれるような、そういう信州型コミュニティスクールを広めていきたいと思っています。

もう一点、海外の人達とのコミュニケーション。新しい県立大学はさっき申し上げましたけれども、全員海外経験させ、異文化に触れさせようと思っています。それから、1年生は全員寮に入れようと思っています。こういう話をして海外に行くと、海外の人達の反応は非常に良いですね。海外の大学の人達と是非うちの大学とでいろんな交流してくれ、留学生を交換したいと話をすると、そういう大学のあり方を世界の大学の人達も共感を持ってくれるので、若いうちからいろんな人と接してコミュニケーションを持てるような人材を育てたいと思いますし、そういうものとの関連で今、中国人民対外友好協会が中国の大学生のインターンシップを日本に出しています。全国で受け入れていますが、実は長野県が一番数多く受け入れさせてもらっています。また、来年度予算に向けて今考えているのは、県内企業は海外に相当進出しており、県内の大学生にもっと海外体験をさせようと思うのですが、単にどこかに行って観光旅行するのではなくて、県内企業の海外事業所でインターンシップすることを県行政が応援するという仕組みを考えたいと検討しています。長野県の若い世代の人達がもっと早い時期から異文化、海外と接することができる機会を増やしていきたいと思っています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

チーム学校という概念があって、様々な専門家からのご協力をいただきながら、更には信州型コミュニティスクールとして地域人材のお力も借りながら進めているところです。今日はタウンミーティングですので、教育関係者以外の県民の皆様も是非一緒に教育の充実に向けてお力をお貸しいただければと思っています。

グローバルとローカルは二項対立ではなく表裏一体のもので、長野県の子供達も英語ができて、これからバンバン海外に出て行った、しかし、海外に行って「長野県てどんなところ？」と訊かれたときに、英語は喋れるけれど語る内容を持っていないのでは、本当

のグローバル人材ではないと思うのです。こうした観点から、残りの時間は、信州ローカルについてしっかり学んでいこうと思います。単に知識として長野県のことを知るだけでなく、地域の中で自分が生まれ育ち、そのまちにはどういうことがあったとかどういう課題もあるとか、その解決のために自分もこうしていくという気持ちを育てていくことです。地域の課題を解決できない人間が世界の課題は解決できないと。地域のことをもっと学んでいかなければいけないということで、「信州学」を来年度から全ての県立学校で、それぞれの地域に根差した学びを深めてもらおうと計画しているところです。小中学校は割と一生懸命に地域学習をしているんですが、高校になると、センター試験をはじめとする大学入試に向けた学力をしっかりとつけなければいけないという要請も強い中で、どうしても地域のことよりも日本共通の知識重視の教育にならざるを得ない。その結果、長野県のことをあまり学ばなかったり、小中学校で学んだことを忘れて首都圏の大学に行って、戻って来ないで、長野県との関係が断たれてしまうことが、我々が危惧しているところです。地域のことについてしっかり学んだ上で、地域課題の解決に貢献できる人材の育成に取り組もうとしているのですが、これは、教育委員会のアイデアではなく知事から提案いただいて、今私のところで考え、進めているところです。知事から、「信州学」についての思いで、是非これをという意見を最初にいただければと思います。

#### 【長野県知事 阿部守一】

いろんな思いがありますけれども、まず、私が知事として県内の子ども達と接する機会は結構あります。学校へ出かけて行って子ども達と話す中で、結構地域のことを分かってないねということを強く感じます。例えば、小中学校は市町村立ですけれども教員の皆さんは県費負担教職員で県教委が人事をやっているわけですが、市町村長の皆さんと話をして、昔は学校の先生、地域にどっぷり浸かって、やれお祭りだ何だと一緒に子どもと遊んだり地域に溶け込んでいたと。先生は忙しくてという話の裏返しだと思いますけれども、なかなかそういう機会も少なくなったり、地域のことを教えられる機会が昔に比べると本当に少なくなっているんじゃないかというご意見もありました。今、地方創生は日本全体の大きなテーマになっています。人口定着、その地域に居続けてもらう、または、外に出ていいんですけれどもまた戻ってきてもらう、又はIターンで人に来てもらう。そのためには、地域の皆さんがそこに住んでいて地域のことを知ってて、地域を愛して誇りを持っていることが大事だと思います。長野県は他の地域に比べると、一般的には地域に対する愛着が高い県だと思います。私の手元に県内企業のデータありますが、世界シェアトップの企業っていっぱいあるんですよね。けれども、子ども達と話をするので、隣にそういう企業があってもその中学校で勉強している子どもは、ほとんどそういう認識を持っていなかったりするので、地域が活性化して存続し続ける上で、地域のことを子ども達、あるいは地域に住んでいる人達をもっと知らなければ、地域を元気にしましょうとか地域で働き続けてねとか幾ら言われても、無理だなと思っています。そういう意味で、地域のことをもっと学んで、伝統や文化、産業、こうしたものをしっかり身につけてもらわなければいけないし、身につけずに県外に出てグローバル社会に出てみても、「一体、あ

なたのふるさとはどういうところですか。」と言われたときに、何も説明できないんじゃないかというような危機感を持っています。教育委員会には是非、信州学を考えてほしいというお話をさせていただいて、具現化してきてもらっているわけでありまして。これは子ども達の教育に限らず、私たち日本人の暮らし全体をとってみても、ちょっと大きな話になってしまいますが、地方自治の充実が日本の発展に大事だという能書きだけは、もう何十年と言われてはいますよね。でも、一向に地方分権が進まない。国が変わらないというのがあります。でも、本気で住民が地方自治、地方分権を求めているかといったら、私は、国民があんまり本気じゃないんじゃないかと思っています。本気じゃないから分権進まないんで。私は分権進めた方がいいと思いますけれども、さっきの多様性の逆ですが、同じ方が安心だよとか、まだお上意識が結構強くて、身近な自治体に任せるよりも国が考えてくれた方が安心できるんじゃないかみたいな国民の意識があるんじゃないかと。それと同時に、我々が日ごろ接している情報、テレビだったり大手のメディアだったり、そういうものを通じて来る情報というのは、軽井沢町や長野県の情報よりも圧倒的に全国ベースの情報の方が量が多いですよ。そういう情報に常に接していると、地域のことを考えるよりも、日本全国画一的にしてもらいたいという発想になりがちだと私は思っています。本当は日本は大きな改革をしていかなければいけないと思いますけれども、始めの第一歩として、子ども達が地域のことを知らないという事態をまず改善しないといけないだろうと思います。そういうところから本当の地方自治や地方分権は進む話だと思いますし、何よりも、学ぶ子ども達が社会に出て行ったときに地域のことをしっかり持っている、自分の基軸があるということがグローバル社会に向けては不可欠だと思っています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

次に、りんさんにお伺いしたいんですが、カナダに行って珍しい日本人として様々なことを質問されたり日本のことを語らなければいけない経験をされてきたと思いますし、逆に29カ国から多くの16歳が来て、彼らがそれぞれの地域について持っているものを目の当たりにしていると思うんです。地域のことについて学ぶ、アイデンティティをしっかり持つということについて、お考えがあればお願いします。

#### 【小林りん氏】

知事のお話を伺っていて二つ思ったことがあります。一つは、なぜ学ぶのかということ、モチベーションですね。二つ目は中身の話です。

まず、英語と同じで、「英語勉強しろ」と言われても生徒は「ふーん」と思うように、「信州学、大事だから勉強しろ」と言われても「ふーん」という感じになります。私も地元の勉強は、いろいろやったはずなんですけど、その教本のタイトルしか覚えていないという状況です。私がカナダに行ったときのように、「あなたの国はどういうところなの。どういうところの出身なの。」と日々、自分のアイデンティティを問われ続けることによって「学ばねば。」と思うと思うんですね。なので、信州学をやることはとても大事なことと思うんですが、同時に、それが必要だと感じられる機会こそが、実は最初の段階で必要なのでは



ないかと思うんです。

それから、中身についてですが、文化、伝統、産業って大事だと思います。私は長野に引っ越してきたんですけども、長野に住んでいてよかったなあと思うのは、自然がすごい。やっぱり、他を圧倒する環境があるんだなあと思います。東京から来ると、空気も違って。知力も大事なんですけれども、体力と精神力の限界に挑戦することは教育的効果も非常に高いと言われていて、そういった自然を活用した教育というのも是非信州学の視点の一つに加えていただけたらなと、個人的には思っています。

#### 【長野県知事 阿部守一】

そうですね。実は今、「森のようちえん」という動きがあって、長野県はこれまでも、いわゆる森の幼稚園と呼ばれるところが多く存在していたところですが、ただ、認可外保育所のようなところが多くて、基盤が弱かったり充実した研修が受けにくい環境があったりした中で、こういうものを広めていく上では、県としてもしっかりとそういう存在を認めて広げていこうということで、昨年からは信州型自然保育の認定制度、愛称「信州やまほいく」としましたが、これを作って自然の中で子育てをする取組を広げていこうとしています。今日お越しの皆さんの中にもご関心のある方は、インターネットで「信州やまほいく」と検索していただくと、動画で子ども達がこんなことやっていて、こういうところで子ども育てたらいいだろうなって私が思うようなものが出てきますので、是非一度ご覧いただければと思います。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

教育委員会でも今、「信州学」について検討していますが、幾つかの県ではそれぞれの県の歴史や文化を学ぶということで、かなり分厚いテキストを作ってきてしっかりやっている県もごございます。ただ、我々長野県としては、そうではない、つまり紙の上で幾ら知識だけを豊富にしても、それは多分何カ月もしたら剥落してしまうという思いがありますので、最低限、長野県民、長野県の高校生として、共通の長野県の歴史、文化、産業、風土、自然について学んでもらうことは基礎知識として大事ですが、そこから先の長野県オリジナルの信州学としては、これらを踏まえて自分の地域のことをより深く調べて、自らもっと学んでもらうというナビゲート機能を持つものにしていきたいと思っています。冒頭、りんさんから問題設定能力が大事だというお話がございました。地域にこういう課題があるんだということを調べる力ということも、信州学の中で身につけていければというのがねらいでもあります。新しい試みですのでなかなか難しいですし、それを実行する上では、それぞれの高校の周りの地域の方々のご協力なくしては成り立たないと思っております。軽井沢高校は先程のグローバルスタディコースということで、既に取組が進んでおります。これは実は、信州学の実践部分の取組としては、全くこれで十分、素晴らしいと思っていますので、それぞれの高校の周辺の地域の方と一緒にやっていくことも大事だなと思っています。

さて、個性を伸ばす教育という中で、海外を見ずに日本国内ばかりを見過ぎだとずっと

批判をされてきた。もう一方で、海外からは「日本の教育は素晴らしいね」と称賛の目で見られているところもあるわけです。この辺についてどうですか。

### 【小林りん氏】

正直、特に日本の初等教育、小学校中学校は、ものすごく評価が高いと思います。理数教育や躰の観点からも、世界的に絶賛されているのが現実だと思います。ノーベル賞も日本人がかなりとっているように、理数系の基礎を全国民にすごいレベルで与えているという点では、日本の教育は素晴らしいと思います。そこは変わってはいけないところなんだと思います。躰教育で言えば、私達も「靴を揃えなさい」と言ってもなかなか揃えない生徒が多いんですが、日本は靴は揃えて当たり前、お掃除して当たり前という文化が、もちろん家庭教育もありますが、学校教育の中で知らず知らずのうちにみんなに浸透していることは、非常に優れた点だと思います。

一方で、先程知事からもお話があったように、全員を「3」とか「4」にするために、「1」のような苦手科目を一生懸命押し上げることに非常に労力が使われているように思います。「1」とか「2」を「3」とか「4」にするために使う労力を、「5」をもっと伸ばすことに使えばと。海外に行って思ったのは、「5」をすごく褒められて「お前すごいよ」と言われると「自分ってすごいのかな」と思い始めるんです。私は日本では数学が苦手だったので「ダメだダメだ」とすごく言われてました。でも、海外に行くと良いところをものすごく褒められて、それで苦手科目も引っ張り上げられるという経験をしました。全教科を万遍なくやっていくというよりは、生徒一人ひとりの良いところにフォーカスして伸ばしてあげる教育がとても大事なんじゃないかと思います。

それから、先生方がとてもお忙しいということですが、行政からのいろんなアンケートが沢山来るというのも一つの要因だと伝え聞いております。私たちも私学で、ほぼ毎日のようにいろんなメールが来ます。これを一本化するとかで事務作業が減ったりする余地はまだあるのかなという感じはするので、是非、県の方にもご検討いただければと思います。

### 【長野県知事 阿部守一】

りんさんの話に私も全く共感するのは、褒めるということですね。日本の場合は家庭も、どちらかという褒めるよりも叱る方がウェイトが高いような気がするんです、自分の経験も含めて。私はアメリカしかよく知らないけど、とにかくよく褒めますね。ああいうのは、日本ももっと見習う必要あるんじゃないかな。日本社会の問題点はいろいろあるんですけど、お互い問題点ばかり指摘し合うことが多くて。学校だけでなく、社会全体として、受容する、受け容れる、褒める、お互いを評価し合う社会を作る中で、子どもたちにポジティブに。子どもの支援条例を作ったり、子どもの性被害をどうするのかとかいうのが今、長野県として検討している課題ですけれども、ずっと子ども達のこと考えていて共通して出てくる話は、子ども達に自己肯定観が無さ過ぎだということです。日本の子どもたちは海外の子ども達に比べて特に低い。「あれが出来てもここがダメだ。」「もっとこうしなさい。」と年中言われていたら、それは自己肯定観が低くなるだろうなと。「こんなこ

とできてすごいね。」「こんなことも気付いたんだね。」と、我々ももっとそういう姿勢を持たなければいけないと思いますが、特に学校はそういうスタンスを持ってもらう必要があるのかなと思います。

それから理数教育の話、これは教育長に聞きたいんだけど。この間中国のある学校に行ってみたら、私立学校だからお金かけているというのものもあるのかもしれないけど、実験施設とか相当なんです。日本の施設、特に公立では、そういうのはあんまり大したレベルじゃないと思うんです。頭の中での理数教育はかなり進んでいるのかもしれないけど、手や体を動かしての理数教育は進んでいるのかどうかというのはちょっと疑問あるんです。

躰の話は重要だと思うんですが、日本で躰の話をするとうすぐ道德の問題になって、道德教育の話になるといつもイデオロギー的な話になるので、教育の場も、イデオロギー的な教育論じゃなくて、もう少しニュートラルに、子ども達にどういうことを教えるべきかと冷静に考える場をちゃんと作らないといけないのではないかなと感じています。これは国レベルでやるとどうしてもイデオロギー論争になりかねないので、市町村とか県の地方レベルで主体的に考えていく世の中にしなければいけないと思っています。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

本当に、自己肯定観が低いというのが日本の教育の今の一番の課題で、少しずつ教育も変わってきているのですが、まだ教え込むという面も強くて、教え込んだのにできないのはお前が悪いんだという観点になりがちなのが事実だと思っています。体罰に代表されるように、スポーツ指導等も従来、上からかなり厳しい形で指導があったわけです。今は種目によっては、これでもかというぐらいに褒めながらやるようなものもあれば、相変わらず昔と同じような種目もある中で、これはスポーツだけでなく、大きく変えていかなければいけないし、教員が一方的に教え込むのではなくて、子ども同士が学び合いを通じて、得意な部分では先生になるし、不得意な部分では他の生徒が先生になるという形で双方の違いを認めながら相互に伸ばしていく観点の授業を県内各地で進めてもらっているところです。

理数教育について日本は大変進んでいるんですが、知識重視の教育になっているのは、設備面での問題もあるんですが、それ以前に実験をする時間がない。実験をすると前後の準備にすごい時間がかかるので、実験をした手順を書いてある教科書を覚えさせるような教育が長らく続いてきた。一方で、それじゃダメだという動きがありながら、どうしても大学入試で測るときには、自分で手を動かしたよりも、それを長時間かけて覚えた方が点数が取れるような試験になっているのが現実なので、抜本的な改革を含めて大学入試改革を行っていくことが国レベルで動いているところです。もう一方で、長野県は従来、実験や観察を通じた理科教育を大切にしてきた。これを、理科教育の県「長野」として、もっと大切にしていこうと、来年度から理科教育の充実に向けて、企業局の電気事業の収益の一部を私どもが頂戴をして、子ども達が実験観察や共同で一緒のテーマに取り組んで一つの答えを導き出すような非常に手間のかかる教育を重視していきたいと思っています。具体的には、中学校段階では、「科学の甲子園ジュニア」という形で、全国の科学が好きだ得

意だという中学生が集まって、実験等を通じ、暗記をしても通用しないいわゆる難題に取り組んで甲子園のようにメダルを競うものを、理科教育のメッカは長野県だというように、是非、長野県で恒常的に実施できるような事業をしようじゃないかと今、知事に予算のお願いをしているところでもあります。豊かな自然の中で実験をして、本当の力を身につけていくことを目指しています。

そろそろ時間になってきましたので、信州学を含めてもう一度全体について会場からご意見あれば、是非頂戴したいと思います。

### 【参加者C】

白馬高校について存続も決まって、全国募集に向けて、グローバル人材をまさに国際観光科で育てていこうということで取り組んでいます。今日は、いろいろな日本の教育の強み弱みについてのお話、本当に納得のいく話ばかりです。強みをいかしながら課題設定能力を培っていくとか、課題を解決していく力を共有する教育をするという意味で、例えば、国際バカロレアというカリキュラムがありますが、全国で今30数校だと思いますが、2018年までに認定校を国内で200校に増やそうと考えているようです。私も子ども3人を育てていて、いきいき育ってくれているのですが、国際バカロレアの学校が近くにあったら最強だと思っています。大自然を誇る長野県に、公立で国際バカロレアを取り入れた学校があるとなれば、きっと全国から移住者が殺到して人口爆発するぐらいの可能性はないかと思えます。県としてこのカリキュラムの導入をお考えになる可能性があるか教えていただければと思います。

### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

インターナショナルバカロレアの高校を増やすというのは、今おっしゃられたように文科省では全国に200校を目指すと言っております。実は昨日、1都9県の教育長会議があってこれが一つの重要なテーマで、各教育長さんみんな、頭を悩ませているという状況です。方向性としては、これはまさに我々が目指すべき道であろうということなのですが。バカロレアのカリキュラムは、各教科を英語で教えるのが基本でした。そこは今、ちょっとゆるくなってきていまして、幾つかの教科を除いては、かなり日本語でもいいとなってきていますが、授業の内容自体が、日本の学習指導要領でこういう知識を学びながらこういう力をつけていくということではなくて、徹底的な課題探求型の授業を追い求めてディベートを中心にしながら、学校で何かを教えるのではなくて生徒が徹底的に自ら学んだ上で、学校では集団の中で意見を交わし合いながら何かを実行していくという、日本の高校教育の中では今まで経験したことのないようなカリキュラムであります。そういうことで、理念はいいのだけれど実際に県立高校でやる上ではどうするというところで、実際には1都9県の中で今、動いているのは東京都だけ、神奈川県が次に動き始めているという状況です。長野県の単位の中で、そういう1校を目指すのがいいのか、逆に、そこまですごく突き抜けた学校はつくれないけどもっと多くの県立高校が探究的な学びを今よりも一段二段広げるような教育をしていった方がよいのかということも含めて、我々議論中、勉強中のとこ

ろです。今日、いろんな意見も頂戴し、りんさんからもアドバイスをいただきながら、公立高校でこういうことを目指すことがどうなのかについて勉強していきたい。歯切れが悪くて申し訳ないのですが、各県の教育長がみんな悩んでいることが良く分かった状況です。

#### 【参加者D】

団塊の世代でございまして、夫が定年になりましたので、日本の中から軽井沢というこの地を選びまして移ってまいりました。先程のお話で、日本にいらした外国の方をグローバル人材の育成で、皆さんのコミュニティの中に何とか入っていただけないかというお話を伺いました。私の住んでいるところにもご近所に結構、団塊の世代でリタイヤ組の方が何組もいらっしゃいます。その中でお話を伺っておりますと、ラテンアメリカの国で日本の一部上場企業の子会社のトップにまでなった方で、20年間ラテンの方々を相手に御苦労なされた方もいらっしゃいます。そういう方が結構、長野県にはお住まいだと思います。ダイヤモンドの原石をダイヤモンドで磨くという方法もお考えいただいて。せっかくそういう方がいらっしゃいますと、地域の子どもたちにも何か良いお話をしてくださるのではないかと思いますので、是非、お考えいただけますよう、よろしく願いいたします。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

貴重なご意見とお申し出をいただき、ありがたく思っております。信州型コミュニティスクールもまさにそうした発想の中で進んでいるところでございます。地域に埋もれている素晴らしい人材、こうした方々をリストアップするところまでまだまだ至っていない学校も多いわけですが、これから長野県の学校はどこも、そうした地域の方々のお力をお借りしながら、ダイヤモンドをダイヤモンドで磨く取組を進めていきたいと思っておりますので、是非ご協力をお願いできればと思います。

#### 【参加者E】

信州学についての具体的な提案を一つ。私自身も信州人ではなく、ここで引退生活を送っているのですが、信州に来て一つ安心したのは県民歌です。小学校や中学校で教えるというよりも、子ども達が内容も分からない幼稚園、保育園の時代に「信濃の国」を全ての子ども達に歌えるようになってもらう。あの歌は本当に素晴らしい歌で、いろんな地理、歴史、人材等が謳い込まれていて。最初の節は、信州は十カ国に囲まれていてと、今は8県ですが、地政学的な信州の位置等というものはあの一言で学ぶきっかけになるのです。あの素晴らしい歌、あれだけの県民歌を持っている県は他には一つもないので、子ども達がおちびちゃんの頃から体で覚えたら、後々、信州をもっと愛してくれるきっかけになると思います。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

「信濃の国」は、今は小中学校、高校でもしっかり教えていまして、一番レベルでは全く歌えない子どもはいないはずですが、ただ、この間、県民アンケートで30代があまり歌え

ないと。その時代は学校でもあまり教えていなかった時代だったということですが、今の子どもたちはしっかり教えていますし、「信濃の国」を通じて長野県について考え、理解を深めていく教育をこれからも進めていきたいと思っています。

あつという間に予定の時間を過ぎてしまいました。最後に、この鼎談を締めくくる上で、まず小林りんさんから、続いて知事に、グローバル人材の育成についての思いを一言ずつ、総括的に頂戴できればと思います。

#### 【小林りん氏】

本日はありがとうございました。私からは二つ。

ISAKの長として、町の皆様方に小中高含めて本当に温かく生徒達と交流をいただいておりますこと、いろんなボランティアの場で生徒達を皆さんが温かく育てていただいていること、心から御礼を申し上げます。ISAKはお山の上の小さな学校ですが、単独で存在するのではなくて、町の皆さんにきちんと顔が見える学校、ISAKが来て良かったなと思っていただけの学校にしていきたいと思っています。それを通じて、町の皆さんのグローバル化に少しでも貢献できればと思っています。

二つ目に、先生方、すごく大事だと思っていまして、教育の素は全て先生にあると言っても過言ではないと思います。現場で本当にお忙しい日々だと思いますし、この場で皆様をお願い申し上げたいのは、先生に全部お任せで文句を言うのではなくて、先生と一緒に家庭や町全体、みんなで学校を支えながら子どもたちを教育するんだと育てていただきたいと思っています。

余談ですけど、今日子どもが40度の熱を出しまして、朝病院に行きましたら先生が渋滞で来られなくて、この会に遅れそうになったんです。事情を話したら、病院が「いいよ、置いていけば。」と言って預かってくれたんですね。東京ではあり得ない。本当に地域みんなで子どもを育ててもらっているとひしひしと日々、感じています。是非、こうした雰囲気やずっと醸成していただきたいと思います。引き続きよろしく願い申し上げます。

#### 【長野県知事 阿部守一】

ISAKが軽井沢に来てもらって本当によかったなあとと思っています。ありがとうございました。これまで行政がしてきたことは、企業誘致をしたり産業振興したり、企業がなければ人が集まらないという発想がずっと続いている中でいろんな仕事をやってきていますけれども、私は、これからは人が人を呼ぶ社会になるだろうと思っていまして、そういう意味で、小林りんさんがいることはすごく大事なことだと思っています。さっき言ったように、県立大学を創るのも、理事長予定者に安藤国威さんに就いてもらって、今までの行政の視点とは全く違う形で海外の企業や大学と繋げてもらおうとしているところが大事な話でありまして、長野県は山に囲まれていますので、何となく閉鎖性が高そうな雰囲気がありますが、山には必ず峠があり、峠の先は必ずどこかに繋がっていますので、長野県は交流が盛んな県だったし、今もそうだと思います。人に着目した政策をしっかり強化すること

によって他地域との交流を広げると同時に、人づくりや人材育成は、新たな意味での教育県をつくることによって人を惹きつける魅力ある県づくりに取り組んでいきたいと思っています。

先程、白馬高校の話がありましたが、白馬高校は全国募集をして、地域の皆さんのおかげで、県立高校の中でも頭一つ抜けた特色ある高校になっていくだろうと思っていますし、国際バカロレアも是非教育委員会、前向きに考えてもらいたいなと思っています。既に、長野県にはいろんな人材が大勢いらっしゃいますので、そういう方達を発掘して活かしていくのは我々の仕事で、私は「人生二毛作社会の実現」ということをいろいろなところで言っています。会社勤めを終えた方が、あとは老後ですという話ではなく、人生80年90年時代ですから、もう一回経験を活かしていただく、あるいはもう一回違う分野でチャレンジしてもらって長野県を創っていきたくと思っていますので、是非、そういう観点でもご協力をいただければと思います。長野県は地方創生をオール信州で取り組みたいと、いろんなところでお願いをしていますので、今日お集まりの皆様方も、教育を中心に、先程のコミュニティスクールにしても新しい学校の運営にしても、いろんな形で皆さんのお力が必要な分野が沢山ありますので、これからも、軽井沢町、それから長野県、様々な施策にご支援ご協力をお願いして、私の最後のコメントとしたいと思います。ありがとうございました。

#### 【長野県教育委員会教育長 伊藤学司】

今日はタウンミーティングということで、まさに県民の皆さんと一緒に信州教育、人づくりに取り組んでまいりたいと思っています。学校の中だけとか学校関係者だけが集まるのではなくて、今日お越しいただいたそれぞれの幅の広い方々のお知恵やお力をお借りしながら、長野県の子供達のために、そしてそれは日本や世界のために繋がると確認をもって、これからも信州教育の充実に努めてまいりたいと思っています。どうぞお力をお貸しいただけますことをお願い申し上げて、この鼎談を締めくくらせていただきます。ありがとうございました。

### 3 閉 会

#### 【広報県民課長 藤森茂晴】

小林様、それから会場の皆様、どうもありがとうございました。

限られた時間でしたので発言できなかった方もいらっしゃると思います。お手元にアンケート用紙をお配りしてございますので、ご意見等を記入していただきまして出口のところに回収箱に提出していただけますようお願いいたします。

それでは、これをもちまして県政タウンミーティングを終了させていただきます。長時間にわたりご協力いただきましてありがとうございました。道路も凍結して危険ですので、お気をつけて運転して、お帰りください。どうもありがとうございました。